



第17回

365日3食から環境を変えていく

文・写真 佐藤剛史 (九州大学大学院農学研究院)

「子どもに健康な体を残したい」、

そう願うのは親として、大人として、先に死にゆくものとして当然のことだろう。では、それだけで子どもが happy に暮らせるかというと十分ではない気がする。「子どもが健やかに育てる環境を残す」、それも大切だ。「子どもに健康な体を残す」「子どもが健やかに育てる環境を残す」、その両方を一気に実現するシンプルな方法がある。

食が、親の健康、そこから産まれる子どもの健康を作る。それは改めて説明する必要もないだろう。

では、なぜ食で環境が変わる

のか。農業は、食べ物だけでは

なく、それ以外のものもつくり出している。例えば、日本全体で1年間にうまれる赤トンボ(ウスバキトンボやアカカネ)は約170〜200億匹で、その90%が田んぼでうまれてるとされる。私たちの周りにありふれている環境や生きものは、農業がつくり出しているのである。逆に言い換えれば、農業のあり方が変わってしまえば、生きものにマインスの影響を及ぼす。メダカやドジョウやトノサマガエルやタガメやコウノトリやトキ。日本の絶滅危惧種の約30%が、田んぼやその周辺の環境(水路、ため池)に生息する生きものだ

と言われている。

ここに、食べ物に安全・安心を追求するだけではないけない、とする理由もある。いくら安全とす外国産のオーガニック食品を食べても、日本の赤トンボやメダカが増えるわけではない。国産の、しかも環境保全的な農産物を食べれば、環境も生きものも守られるのである。実際に、「トキ米」「コウノトリ米」「タガメ米」というような取り組みが全国各地で始まっている。

食の力は大きい。365日3回の

力は大きい。もし、食料費の10%でも、環境保全的な農産物に振りかけることができれば、日本の農地の10%で環境保全的

な農業が営まれることになる。

そこにはメダカが泳ぎ、トノサマガエルが鳴き、その空にはコウノトリやトキが舞うことになる。

ゴミ拾いもネイチャーゲームも森づくり活動もエコバック持参も大切だ。しかし、もしかしたら最大の環境保全活動は、私たち一人一人がちゃんとしたものをちゃんと食べることにあるのではないかと思う。環境教育の第一歩もそこにあるはずだ。

ちゃんとしたものをちゃんと食べる。自分に優しくなれば、人にも、環境にも優しくなれる。

Profile



佐藤 剛史 (さとう ごうし)

九州大学大学院農学研究院助教（農学博士）。

モットーは「研究と実践の両立、統合」。学生時代に、NPO 法人環境創造舎を立ち上げ、代表理事に就任。里山再生活動、生物多様性保全活動、市民参加型のまちづくり、食育などの事業・活動を展開。NPO と行政との協働事業、企業との協働による「飲めば飲むほど緑が増える『九州大吟醸』」など、そのアイデアと先進性、行動力が高い評価を受けている。また、こうした経験を生かし、様々な参加型のワークショップ、イベントをデザイン、ファシリテートしている。



自分でつくる「弁当の日」

大学生の食生活はひどい。大学生約 1500 名を対象としたアンケート調査によれば、43%の大学生が朝食を抜き、35%の大学生が全く自炊せず、33%の男子学生が毎日ジュースを飲み、16%の大学生はご飯さえ炊いたことがない。

だからといって学生を責めることはできない。大学にはいるまでに、家事の力を身につけるためのトレーニングを受けてこなかったからだ。では、大学で、そんなことまで教育すべきか、できるのか、なんて考えはじめると、なかなか難しい。

しかし、黙って見ているわけにもいかない。大学は社会に出る前の最後の砦だ。社会に出れば、そうしたトレーニングの機会、時間はもっと失われ、そして彼、彼女らはすぐに親になる。

そこで「弁当の日」である。親ではなく、子どもが自分で作る「弁当の日」。この取り組みは香川県の一小学校から始まり、九州各地の小学校、中学校にも広がりつつある。大学生も、負けとられんばいと、弁当の日に取り組みははじめた。九州大学では、週 1 回、学生が 1 品ずつ弁当を持ち寄り、みんなで食べる。

これを 1 年づけている。家事の力は増し、料理のレパートリーも増える。何よりも、学生たちは、「誰かが喜んで食べてくれる幸せ、誰かが褒めてくれる嬉しさ、皆で食べる楽しさ」をかみしめている。そんな幸せを味わった学生は、きっと幸せになる、きっと素敵大人になる。



「いただきます」いつもより心を込めて言うことができました。(大学 4 年女子)



小学校の頃、給食のない週 1 回の弁当の日で作ってくれた弁当を久しぶりに思い出しました。(大学 4 年男子)



食べられることに感謝。作ってくれる人に感謝。食材を提供してくれる人に感謝。(大学 2 年女子)

詳しくは：http://www.nishinippon.co.jp/nnp/lifestyle/shoku/2007/04/post_118.shtml

だろう。
では、なぜ食で環境が変わる

んぼやその周辺の環境（水路、ため池）に生息する生きものだけ

に振り回れることができれば、日本の農地の 10% で環境保全的